
last letter

level 43

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

l a s t l e t t e r

【Nコード】

N 2 3 6 5 C

【作者名】

l e v e l 4 3

【あらすじ】

昔付き合っていた君からの手紙受け取った僕は違和感を覚え、そして翌日、君は旅立っていった

第1話 突然の手紙

街の隅々まで照らす太陽が心地良く、あれ程までに咲き誇っていた桜の花びらが、一枚も残すことなく散り行く頃、君から最後の手紙を受け取った。

住み慣れた実家を離れ、悠々自適な独り暮らしを送っていた僕は、その手紙を直接受け取る事が出来ず、母親からの連絡と共にその存在を知り、少しだけ遠い実家に取りに行った。

慣れた電車を乗り換える事2回、小一時間程で実家のある最寄り駅に着き、そこから早足で10分近く歩いて、見慣れた我が家に到着した。

誰も居なかったせいか、静寂に包まれた実家はまるで他人の家に来た様にも思えたが、綺麗好きな母親の、手入れが行き届いた廊下と、子供の頃からの変わらぬ匂いで、やはり実家に帰ってきたという安堵感を感じる事が出来た。

相変わらず雑然とした僕の部屋の隅にある古びた机の上に、少し淡い桜色をした君からの手紙が置いてあった。

僕はその4枚にも渡る手紙の一字一句に、普段はまず有り得ない大粒の涙を流す事になった。

元々文章を書く事が不得意だった君が綴る手紙は、少しだけ読み辛く感じられたのだが、そんな事は問題ではなく、むしろそのリアルかつ何とも言い難い物悲しさが僕の心を大きく、そして激しく揺

さぶった。

それはまるで遺書の様に思え、あまりにも切な過ぎる内容に感じられたのだった。

僕はその場で3回読み直し、4回目に入ろうとした時には、既に溢れた大粒の涙で読み返す事が出来なくなっていた。

その尊く、かつ何よりも重く感じられる君からの手紙を、とりあえず持参したまだ真新しい黒のバックの奥底にしまいこみ、僕は実家を後にした。

翌日も文句の付け様がない程の心地良い空模様で、昨日からの連休だった僕は、特にこれといった用事はないけれど、ただ何となく出掛けようと思った。

一つ隣駅の、ヘビーローテーションになりつつある小さなカフェで、冷たいカフェラテでも飲みに行こうかと思ったのだが、何だか気分が乗らず行くのをヤメた。

別段頭とかお腹とか、具合が悪い訳でもなく、まして給料日前で懐具合が淋しい訳でもない。

でも理由がわからない。

出掛ける事が何より好きで、カフェラテもここ1週間飲んでいない筈なのに、何故か自分自身から行きたいという気持ち湧いてこない。

10分近く悩んでみたのだが、結局仕方無しに僕は出掛けるのを潔く諦め、代わりにしばらくの間洗っていなかったお気に入り、

まだ新しい淡い灰色をしたニューバランスのスニーカーを、念入りに洗う事にした。

洗い終わり、猫の額程の大きさしかない、少し小綺麗なベランダに立て掛けて、ついでにそこで今日初めての煙草に火を付けようとした時、機種変したばかりの携帯がテーブルの上で遠慮しがちに鳴った。

君が亡くなったのだった。

第2話 笑顔の告別式（前書き）

告別式に参列した僕は、普段は流す事がない涙を延々と流す。
だが、最後には笑顔で式場を後にするのであった。

第2話 笑顔の告別式

外は夜半から引き続き冷たい小雨が降っていて、昨日までの小春日和に裏切られた様な気がしていた。

まだ2、3回しか袖を通していない、少しだけ新しい喪服を着て君の告別式に向かった。

昼間の都営新宿線は、朝の混雑がまるで嘘の様に乗客がまばらで空席が目立ったのだけれど、僕はその有り余るどの空席にも座る気がしなかった。

地下鉄故に外の景色は何ら変わる事なく、普段なら面白味も何もないのだが、もしその有り余る空席に腰を下ろし、まばらに座っている乗客の顔を見てしまったら、例えばそれが初老の男性だとしても涙を堪える自信が僕には無かった。

普段から人前で涙を流す事にかなり抵抗がある自分にとって、その数十分間の車内は苦痛以外の何物でもなかった。

本当は誰かにすがり、そして大声を出して泣きたかった。

でも、この目的地へと向かう空間では出来ない。

いや、正確に言う勇气和無かったのかもしれない。

泣きたいという哀しみのストレートな表現を自身の心で抑圧する為に、唯一の抵抗する術として、扉の端に寄り掛かり、ただ外を眺めていたのだった。

数時間にも感じられた都営新宿線を降り、君の自宅のある最寄駅に着いた時には、霧の様だった小雨が、何時しか本降りになっていた。

別にずぶ濡れになっても良かった。

むしろその方が、ずっと必死に堪えていた涙を流せるいいチャンス

スだった。

ただ、時間が押し迫っていた事もあって、いかにも暇そうに路上駐車していたタクシーに乗り込み、式場へと向かった。

2メートル程で到着し、運転手に軽く会釈をして、一つ大きな溜息を吐きつつ、小走りで中へ入っていった。

久し振りに再会した君は、決して僕に話しかけてくれる事など無く、お喋り好きだった様子は微塵も感じられ無かった。

でも、綺麗に化粧をされた君の表情は本当に安らかで、僕にはほんの少し微笑んでいる様に思えた。

君の笑顔が誰よりも輝いていて、そして誰よりもその笑顔が好きだった僕にとって、棺の中に居る君が、最期までその笑顔を絶やさないで居てくれた様に思えて、今まで必死に我慢していた涙が、人目を気にする事など関係無く溢れて出ていた。

僕は暫くの間、君の側から離れる事が出来なかった。

正確に言うと、自分の身体がまるで金縛りにあった様に動けなくなっていた。

もうすぐ君のその安らかで、微笑んだ顔が灰になってしまいかと思うと、足が棒の様になり、その場から離れるなんて思考は持ち合わせていなかった。

ようやく動ける様になった僕は、何とか部屋の隅まで歩き、そこにあった古びた椅子に腰を下ろした。

そこでどのくらいかは憶えていないが、君がくれた言葉、そして君との沢山の想い出が走馬灯の様に駆け巡った。

そして一つ、君が僕にくれた大切な言葉を、僕はふと思い出した。

辛い時こそ笑っていてね

僕の身体は脱力感で気だるかったけれど、大きな深呼吸と共に立ち上がり、もう一度君の側まで行った。

僕は精一杯の笑顔を、安らかに眠る君に見せた。
そしてもうそこには涙は無かった。

最後に僕は君の両親に深々と頭を下げ、式場を出る間際に再び頭を下げた。

気が付くと、あれだけ降っていた雨はすっかり止んでいた。

彼方此方に水溜まりが出来上がっていたせいで、歩き辛いとは思ったけれど、無性に歩きたい自分がいた。

知り合いと一緒に帰ろうと誘われたのだが、何だか独りで歩きたかった。

丁重に断り、僕は独り、帰路についた。

第3話 苦い煙草（前書き）

君の死に直面した僕は、脱力感と虚無感に襲われる。
何も出来ない自分を情けなく思い、そして欲を失っていく

第3話 苦い煙草

帰りの地下鉄の車内は沢山の人々で込み合っていて、往きとは異なり、空席などある筈も無かった。

切に座りたいと思ったが、見知らぬ乗客に、席を譲ってくれ、なんて言う勇氣なんか微塵も持ち合わせておらず、かといって床に直接腰を下ろす訳にもいかなないので、僕はグツタリと往きの車内同様に、扉の隅っこにもたれかかって我慢した。

ようやく駅に到着し、寄り道もせずに帰ろうと思ったけれど、散々涙を流したせい、少し空腹感を覚えた僕は、駅前のコンビニで幾つかのサンドウィッチと少しだけ高いカフェラテを買った。

相変わらず水溜まりが彼方此方に出来ていたが、僕は気にする事無く、ゆっくりとした足取りで家に向かった。

部屋に入るや否や僕はベッドに大の字になって寝転び、暫くの間、僅かに黄ばんだ天井を眺めていた。

気付けばまた、大粒の涙が溢れていた。
声を出しておもいきり泣いていた。

恥も外聞も無く、ましてや見栄なんてモノも全く関係なしに泣き続けた。

涙が渴れたのか、ようやく泣き止んだ僕は、さっきコンビニで買ったカフェラテと、テーブルの上に無造作に置かれたクールマイルドを手に取り、窓を開け、狭く、そして少し小綺麗なベランダに足を投げ出しながら、煙草に火を付けた。

いつもと違う味に思え、2、3口で灰皿に押し付け、カフェラテをゆっくりと飲んだ。

もう一度新しい煙草に火を付け、今度はいつもと同じ香りと、メ

ンソール独特の味を感じる事が出来て、少し安心した。

残り半分くらいになったカフェラテを一気に飲み干し、続けて煙草をまた同じ灰皿に押し付けて消し、窓を閉めた。

さつきは空腹だった筈なのに、何故か食欲が湧いてこなかった。

買ってきたサンドウィッチを小さな冷蔵庫に入れ、そして部屋の隅で壁に寄り掛かり、何をする訳でもなく、時計が奏でる秒針の無感情な音色を、ただ聞いていた。

食べる事も、寝る事も、何もする気が起きなかった。

余計に付け足すなら、人間の三大欲で言うところのあと一つ、性欲に至っては、長さにするなら1ミリも無かった。

ただ頭の中では、昔誰かに言われた当たり前の言葉が浮かび上がり、そしてゆっくりとしたテンポで駆け巡っていた。

人はいつか死ぬ。

そんな事十分過ぎる程わかっていた。

頭ではわかっているけれど、何故それが今、君だったのか、何故こんなにも早く、それが君の元に訪れる事になったのか。

そう考えると、僕は胸が張り裂けそうな気持ちになった。

辛い時こそ笑っていなければ君は悲しみ、そして怒るだろうけれど、僕一人しか居ないこの空間では、やはり笑う事など出来る訳もなく、ただ時間だけが静かに過ぎていくだけだった。

第4話 引きこもり（前書き）

君との死別に立ち直れず、暫くの間、部屋に引きこもる自分。
やっとの思いで外出した矢先、君の母親から電話がかかってきたの
だった。

第4話 引きこもり

君の告別式から数日間、僕は何もする気が全く起きず、俗に言う引きこもり状態になっていた。

どちらかと言えばアウトドア派で、新しいモノ好きな僕は、以前なら2日間も外出しないと、身体がむず痒くなってきた、何かしら名目を付けては外出していた。

それなのに今の自分は、情けない程精神的に落ちていて、僕が最も嫌いな僕になっていた。

煙草の本数だけが増えていたせいか、お気に入りのステンレス灰皿がまるで、食傷気味だと言わんばかりにテーブルの上に淋しく佇んでいた。

そのせいもあって、いつも小綺麗にしている8畳程の部屋には、むせかえる様な煙草の香りが充満していた。

耐えきれなくなったのか、外の新鮮な空気を欲して、ようやく窓を開け換気をした。

少し熱目のシャワーをいつもより長く浴びた後、今にも溢れ出しそうな吸殻を片付け、勿論その灰皿も流しで綺麗に洗い、定位置であるテーブルの真ん中に置いた。そして本当に久し振りに外に出たのだった。

雲一つなく、文句の付けようがない程のいい天気だったが、数日の間、引きこもりをしていた自分にとっては贅沢な話だが、少し迷惑に感じられた。

外出したのはいいけれど、何の宛も無く、それでいて何かしらをしたい訳でもなかった。

ふとお腹の虫が鳴いている事に気付いた僕は、とりあえず駅前のたまに顔を出す、小洒落たカフェに向かう事にした。

店内はアイドルタイムだった事もあって、明らかに空席が目立っていた。

奥にある大きなガラスに仕切られた喫煙席に座り、考える間もなく僕はカルボナーラとカフェラテを小声で注文した。

煙草に火を付けたまではよかったが、空腹だったせいかな、一口で気持ち悪く感じ、すぐに手入れの行き届いたガラスの灰皿に押し付けた。

程なくして注文していたカルボナーラが目の前に到着した。

僕の好物であり、かつ空腹も手伝ってか、ものの4、5分であっさりと完食した。

やっと空腹感が消え、気持ち悪さも無くなった僕は、少し満足気に食後に届いた冷たいカフェラテを一口飲んだ。

また煙草を吸おうかと思ったが、意味はないけれど、ただ何となく吸うのを止めた。

その代わりという訳ではないが、もう一口カフェラテを飲もうとした瞬間、デニムの右ポケットに窮屈そうにしまわれていた携帯がバイブレーションと共に、控え目な音量で鳴った。

ディスプレイには見知らぬ番号が表示されていて、一瞬躊躇ったが、小さな勇気を出して電話に出てみた。

か細く、それでいて透き通った声の女性は、そう、君の母親だった。

第5話 見えない不安（前書き）

君の母親からの不意の電話。

それに動揺する自分。

逃げ出したい衝動を必死に堪え、意を決して君の母親の元へ向かうのであった。

第5話 見えない不安

5分くらいか、いや10分くらいだったかもしれない。

正確にはわからないが、君の母親との重く、そしてかなり長く感じられた電話を切った後、淋しそうにテーブルに取り残された半分弱のカフェラテを一気に飲み干し、手短に会計を済ませた後、僕は駅前の小洒落た店を後にした。

翌日、いつもよりもかなり早く目が覚めた僕は、何だか全くもって落ち着きがなかった。

君の母親との約束の時間は11時で、支度の時間を加味しても9時に起きれば十分間に合うが、5時過ぎに起きてしまった事もある、何をしていいか迷う自分がいた。

とりあえず使い古したヤカンに冷蔵庫に入っているミネラルウォーターを注ぎ、コンロの火を付けた。

その間に、これまたいい具合に使い古したコーヒーマーカーをキッチン収納から取り出し、定位置である部屋の真ん中に鎮座するテーブルの上にセットした。

数分後、コンロの上にあるヤカンからうるさい鳴き声が聞こえてきたので、小走りで火を止め、それをコーヒーマーカーに注いだ。煙草に火を付けゆっくりと一服しつつ、入れたての少し酸味のあるコーヒーを口に運んだ。

寝起きの空腹状態で口にしたコーヒーは、刺激のかつ胃に染みる様に感じられたが、僕は気にする事などなく、煙草とコーヒーを交互に口に続けた。

様々な事が自分の頭の中を巡り巡っていた。

君の母親の用はなんだろう

僕に何を喋りかけ、何を伝えるんだろう

これから全く予想出来ない未知数な展開に不安と少しばかりの恐怖を覚えた僕は、身震いしながらも、何とか毅然としようと思い、立て続けにまた煙草と新たに入れたコーヒーを口に運んでいた。

気付けば部屋の壁に掛けてある時計は8時半を回っていた。

根が生えて、すっかり腰が重くなった身体に鞭を打ち、かなり熱目のシャワーを長めに浴びた後、普段と同じブルガリの香水を控えめに付け、無難なシャツに無難なボトムで身を包んだ。

多少早くはあったが、この部屋に居ても落ち着かないだろうと思いい、一つ大きな深呼吸をし、意を決して玄関の扉を力強く開け、そして家を出た。

駅迄の道程は、思いの外遠く感じた。

歩き慣れている筈なのに、足がまるで棒のようになっていたのか、前に全然進んでいかない気がした。

ようやく駅に着いた時には、左手に偉そうに輝くオメガのスピードマスターが9時半近くになっていた。

やはり予定よりも随分早いとは思ったが、このままこの駅前で躊躇っているのは、逃げ出し、そして行かなくなるかもしれない。

僕は自宅を出る時同様、一つ大きな深呼吸をし、タイミング良くホームに滑りこんできた京王線に急ぎ足で飛び乗ったのだった。

第6話 勇気を出して（前書き）

君の母親との約束の日。

少し早目に家を出た自分だが、妙に落ち着かない。

意を決して家の近所に到着した僕に近寄ってくる気配。
それは君の母親だった。

第6話 勇気を出して

デシヤブではないけれど、車内はあの告別式の日と同様、朝の混雑が嘘の様に目に余る程の空席がある。

ただあの日と異なるのは、扉の側にもたれかかるのではなく、真っ先に目に入った角の空席に腰を降ろした。

決して疲れていた訳でもなく、ましてや涙が溢れ落ちそうだった訳でもない。

座って、そして自分自身の落ち着きを取り戻そうとしていた。

笹塚で待ち合わせをしていた都営新宿線に乗り換え、そこから十分で君が使っていた最寄り駅に到着した。

自分で落ち着きを取り戻すことに必死だったせいかな、妙にあっさりと到着した事に少しの違和感がある。

だが、気にする事は出来ない。

いや、気にするべきではないと言った方が正解か。

あっさりと到着した空席だらけのその車内で、いつの間にか腹を据えていたらしく、頭の中には君の家に向かう事だけを考えていた。

以前の様な、明らかに暇そうな客待ちのタクシーは駐車していない。

仕方なく流しのタクシー目当てに、目の前に走る片側2車線の通りへと一歩二歩出てみると、幸運な事にものの数秒で緑色のタクシーが目の前で止まってくれた。

僕にしては愛想良く行き先を告げ、運転手の歯切れの良い返事と共に車は走り出した。

渋滞もなく程なくして君の家に着いたのだが、左手にしたオメガの時計の差す時刻は10時半。

まだ少し早い。

これから起こるであろう未知なる出来事に、高揚しつつある自分の気持ちを抑えようと思い、先の曲がり角まで行く自分。

そしてボトムベルトにぶら下げてある円筒型の携帯灰皿を片手にクールマイルドに火を付けた。

思いの外苦く、メンソール特有の香りがいつもより感じられない。不味いと感じながらも半分弱まで無理矢理吸い、その黒い携帯灰皿にねじこんだ。

結局15分近くを潰し、10時45分を過ぎた頃、向こうから僕をめがけて真っ直ぐに歩いてくる気配を感じ取った。

数回だけの面識だったので顔はうろ覚えだったが、直感でわかった僕がいる。

そう、君の母親だったのだ。

よく来てくれたわね

10時から待っていたから、そんなところで時間を潰さなくてもよかったのよ

電話の向こうと変わらない、か細く、そして透き通った声。

庭先から全て見ていたらしい。

少し恥ずかしく顔を赤らめた僕に君と同じ笑顔を、いや、君の産みの親だから、これが本物かもしれないが、それを見せてくれた。

立ち話もあれだから、さあ中に入って

優しく促されるまま、恐る恐る僕は君の家へと足を踏み入れて行



第7話 尊い言葉（前書き）

君の母親と話す僕。

これから何が待ち構えているのかと思っていた自分に、君の母親が僕に差し出したモノは意外にも見覚えのある形見だった。

第7話 尊い言葉

何処かで覚えのある、棘のない丸みを帯びた澄んだ香り。

線香から漂う嫌いではない匂いに混ざってはいるが、間違いなく昔僕の大好きだった君の香り。

まるで今にも君が、塵一つない廊下の中程にある階段から降りてきそうな不思議な感覚に包まれたが、すぐに自分を取り戻し君の遺影の前に静かに座った。

目を閉じて無心で数分間手を合わせた後、促されるままにリビングへ向かい、いかにも高級そうな黒いレザーのソファアーに腰を浅めに掛けた。不安と緊張とでカラカラになった喉を潤す為に、差し出してくれたアイスコーヒーを一口。

止まらず、半分近く迄飲んだ頃、君の母親が僕の目を真っ直ぐに見つめるながら口を開いた。

貴方に渡したいモノがあって、今日来て頂いたのよ

それは意外な言葉だった。

朝起きて、電車の中、ここまでの道程で散々考え、悩み、悶々としていた自分が呆気なく否定され力が抜けた自分。

と同時に複雑ではあるが、安堵の気持ちたちが沸き上がる。

君の母親に何をぶつけられると思い、そして僕は何を求めている

のだろうか

様々な思いが巡るその表情を察してか、君の母親は微笑みながら淡い琥珀色をしたハンカチに包まれた何かをそっと目の前に差し出した。

そっと両手で開き、唾を飲み込み中身を凝視する。

意外にも見覚えのあるシルバーのリングだった。
数年前、僕が君に贈ったリングだった。

何故？

わからない

首をほんの少しかしげて、視線を君の母親の大きな瞳に合わせる。
君の母親は変わりない、か細く、そして透き通った声で優しく、
淡々と語り始めた。

正直、耳に全く入っていなかった。

ただ、これが君の形見だという事だけは明白に理解出来た。

話の最後に君の母親がテーブルの上に丁寧に置いた手紙。遺書、
いや遺書というよりも君が綴った最後の手紙と言った方が正しい。
それをゆっくりと目を通し、ようやく耳に入ってこなかった君の
母親の話を飲み込む事が出来た。

貴方に貰って欲しいの
それが娘の願いでもあるから

今にも溢れ出しそうな涙を必死に堪え、素早く立ち上がり深々と心から頭を下げた。

帰り際、綺麗に整理されている広めの玄関でもう一度、君の母親に頭を下げる。

娘の分まで必死に生きてね

その尊く、本当に重い言葉に、僕は涙を止める力など残っていなかった。

第8話 胸元の形見（前書き）

形見として受け取った見覚えのあるリング。
それを肌身離さず身に付ける事に決め、失われつつあった自分らしさを取り戻して行く。

第8話 胸元の形見

目が腫れて、いかにも泣き顔になっている自分を容易に想像する事が出来る。

それを周囲に悟られるのがこの上なく嫌で、バックの奥底に忍ばせていたラルフローレンの白いキャップを目深に被った。

帰りの電車も相変わらず迷う程の空席が目立つ。

泣き顔の僕にとっては好都合ではあったが、キャップで隠したその顔を念には念を入れて見られぬ様、珍しくシルバーシートに腰を下ろした。

普段なら絶対に座る事はないのだが、乗客の少なさも手伝ってか、あまり気にせずに座った。

くだらない、車内の中吊広告を漠然と眺めながら僕はあの尊い言葉、重すぎる言葉の意味を噛み締めていたのだった。

家に着いた時には、既に時計は2時を回っていた。

小腹が減った僕は、駅前で何かを買ってこればよかったと少し後悔しつつ、先に立つ喉の渇きの方が気になり、朝一で入れたコーヒーの飲みかけを躊躇うことなく一気に流し込んだ。

そこで、ふと何かを思い出したかの様に、君の母親から受け取ったリングをテーブルの上に置いてみる。

君の全ての感情

喜怒哀楽というモノだけじゃない全ての想い。

それがこのリングにはぎっしりと詰まっている。

僕はそう想った。

ようやく、というよりもやっと空腹の限界に達した僕は、期待の全く持てない小さな冷蔵庫を物色してみる。

予想通り見事に裏切られ、引き続き流しの下収納を物色。

見つけたのはありふれた備蓄用に買い置きしてあった即席ラーメン。

嫌いではないが決して大好物でもないそれを、仕方なしに食べる事にした。

美味しいモノを食べるのではなく、空腹を満たす事が目的だった為か、何の工夫もなくあっさりと作り、猫舌ではないから次々に口の中に押し込み、ものの2分で完食した。

煙草が吸いたくなり、カバンから多少クシャクシャになったクルマイルドを取り出し、火を付けた。

吸いながらふと頭をよぎる。

このリングを肌身離さず持っていたい

まだ半分近くを残して、お気に入りのステンレス灰皿に煙草を押し付け、テレビの横に置いてあるアクセサリーケースをそっと床にひっくり返した。

記憶通り、スクリーンタイプのチェーンを見つけた。

それに君の形見であるリングを通し、そして鏡の前で首から下げてみる。

思いの外似合う自分。

これにしよう

君がいつも側にいる。

胸元にいる。

それでいて、君の分まで必死に生きて行く。

僕は吹っ切れたのか、自信を取り戻していた。

第9話 不思議な体験（前書き）

君が夢の中に現れた。

だが、夢にしては妙にリアルで戸惑う僕。

果たしてあれは夢だったのか？

それとも現実か？

そんな不思議な感覚に僕は包まれてゆく。

第9話 不思議な体験

胸元に君の形見を身に付けてから数日後、僕は鮮明かつリアルな夢を見た。

君が足元に立っている

大好きだったあの笑顔で僕をじっと見詰めている

手を差し出そうとしてみたが、身体が全く動かない

足を動かそうとしても全く力が入らない

小さな恐怖が僕を襲う

ただ、君は何をする訳でもなく僕を見詰め続ける

自然と恐怖心が溶けていく

と同時に細く、本当に透き通った声で君が口を開く

そしてゆっくりと囁いた

ありがとう

大好きだったよ

負けないで

僕はその言葉を最後に目が覚めた。

しばらく動けない自分。

夢だったのか？

それとも本当だったのか？

不思議な感覚からはなかなか覚める事が出来ず、おもむろに冷蔵庫から烏龍茶を取り出し、テーブルの上に無造作に置かれたグラスに丁寧に注いだ。

それを一気に飲み干し、もう一度その空いたグラスに注ぐ。

煙草にジッポーで火を付け、その不思議な感覚に少し酔いしれながら考えていた。

あれは夢じゃない

直感ではあるが、僕は疑いもなくそう感じていた。

自分はオカルト的な事があまり好きではない。

いや、むしろ嫌いといったほうが正しいと思う。

それなのに何故君だと思ったのか、正直、自分自身でも全然わからなかった。

ただ唯一わかってる事は君が夢に現れて、僕に笑いかけてくれて、最後に言葉を残してくれた事。

そして目が覚めた時、君の香りがした事。

間違いなく君の香りだった。

そう心から確信していた。

僕はその不思議で、かつリアルな感覚から解き放たれた様な気が

して、少しだけ安心した。

とても不思議な体験だっただけに、親しい友人や信頼している家族に伝えようかとも思ったのだが、冷静に考えてヤメる事にした。信じて貰えない、という後向きな理由ではなく、単に言いたくなかったのだ。

僕の心の奥底に留めて置く優越感。

いや、安堵感の方が近いかもしれない。

何週間もずっと笑っていなかった僕の顔は、久し振りにほんの少しだけ微笑む事が出来た。

笑う事が苦手な僕が、君の望む笑顔に近づけた瞬間でもあった。

第10話 宛の無い旅（前書き）

あの不思議な体験から、自身を制御する事が難しくなってきた僕。
このままじゃダメだと思い、何の宛もなく気分転換の旅へと向かう。

第10話 宛の無い旅

あの不思議な出来事に遭遇してから、僕はもう一度君に逢いたいという気持ちが日に日に強くなっていた。

絶対に不可能で、有り得ない事だというのは十分わかってるつもり。

でも、どうしてもあの出来事が夢だとは思えない自分がそこにいた。

君への想いが深く募り、そしてそれがカタチとなって僕の夢に現れた。

理屈ではただそれだけ。

でもあの目覚めた時の香り、そう、君の香り。

決して幻香なんかじゃない、あれはどう説明するのか。

自分でも容易に導く事が出来ない解答に、僕はしばらくの間もがき、葛藤し続けるのであった。

数える事3日、延々とあの出来事を頭の中で考え過ぎたせいか、僕の思考回路は麻痺する寸前だった。

別に自分を追い詰めなければならぬ理由なんて何処にも存在しない。

ましてや君が折角現れてくれたのに、それが元で自分自身がノイローゼになっては元も子も無い。

気分転換ででしょうか？

そんな事を漠然と思った。

そういえばここ数週間、沢山落ち込んで、沢山哀しんで、そして沢山の涙を流して。

ただそれだけだった。

正直いつてかなり煮詰まっていた。

よし、日帰りでもいい、小旅行に出よう

この煮詰まった気分を転換する為、そして何よりも自分自身を見つめ直す為に僕はとりあえず出掛ける事にした。

桜の花びらもすっかりと消え、大分暖かくなってきたとはいえまだ薄暗く肌寒い明け方の4時。

少し大きめのポーターのバックに2日分の適当な着替えとタオルを無造作に押し込み、僕は家を出た。

駐車場迄の5分の間に唯一ある自販機で、眠気覚ましの意味も大いに込めてブラックを買い、お気に入りの少し古くなってきた車に乗り込む。

エンジンを掛けて車の暖気を待ちながら、買った冷たいブラックを飲み、続けて今日初めての煙草に火を付ける。

丁度1本吸い終わり車の灰皿に押し付けた頃には、暖気完了と言わんばかりに水温計のメーターは中程を指し示していた。

しばらくの間行先を何処にするか考えてはみたけれど、全く思いつかない。

愛車は既に準備万端でも、肝心な僕がウダウダしては始まらないと思う、目的地の無いままとりあえず走り慣れた甲州街道に出る事にした。

思いの外、甲州街道は結構混んでいた。

渋滞が何よりも大嫌いな僕は、その連なった車列を避けたいが為に、予定外な環八へと入っていった。

勘は当たった様で、さっきの渋滞がまるで嘘の様に環八は何不由なく流れている。

幸い信号にも捕まる事なく数キロ走り続けたその時、ふと大きな看板が目に入った。

関越道 大泉入口

やっとの事で信号に捕まった僕は、バックの中にある財布の中身を急いで確認してみる。

いいのか、それとも悪いのか、1万円札が5枚程中に入っていた。

目的地も何一つ決まっていなまま、まるで何かに引き寄せられるかの様に、僕は全く躊躇する事なく関越道に乗ったのだった。

第11話 目先の目的地（前書き）

朝早く車に乗り込み、宛のない旅に出た自分。

惰性で高速を走りつつ、漠然と目的地を考え続ける。

そして君との思い出を頼りに昔よく遊んだ長野へと向かって行く。

第11話 目先の目的地

黒いカーテンに覆われていた空は少しづつ明るくなり、車内に付いてあるデジタルの時計は5時を表示していた。

環八同様、関越道も時間が早いだけあってまばらな交通量。

アクセルをおもいつき踏み込んで、回りのどの車よりもスピードを出せば気持ちいいかもしれないが、少々古くなった愛車を労る意味でも流れに身を任せる程度で走らせていた。

高速に乗ったという事で、かなり遠出になるのは理解していた。でも肝心の目的地が未だに決まらない。

そうこうしているうちに、もうすぐ埼玉を脱出しようとしている事に気付く。

流石にヤバいと思った矢先、ふと頭をよぎる地名。

長野？

君とよく行った長野。

そして君と離れ離れになってから行かなくなった場所。

よし、長野に決めた

行先をやっと決める事が出来た僕は、走っている関越道から上信越道へと愛車を進ませて行く事にした。

今迄走ってきた関越道よりも更に上信越道の交通量の少なさに不安がよぎる自分がいたが、そんなことを吹き飛ばすかの様にアクセルを踏み続けた。

朝一で買ったブラックのコーヒーが空になっていたのもあり、また少しばかりの尿意を感じていたので何処かSAにでも寄ろうかと考える。

この先には君とも立ち寄った事のある、行き慣れた横川SAが在ることもあつてか、僕はとりあえず目先の目的地をそこに決める事にした。

車に備え付けてある小さなデジタル時計が6時半を表示し、ようやく当面の目的地であつた横川SAに到着した。

大きな施設だけあつて、結構な賑わいを見せている。

僕はトイレの側にある、車群とはちよつと離れた場所に愛車を止め、小走りでトイレに駆け込んだ。

用を済まし、ボトムの左ポケットに忍ばせていた真新しいハンカチで手を拭きながら、自販機の列へと移動。

数分物色したのだが、結局何の代わり映えもしない先程とは他社のブラックを買った。

喫煙所で本日2本目の煙草に火を付け、すっかりと明るく、そして文句の付けようがない程の晴天を仰いだ。

煙草を珍しく根元まで吸い灰皿に投げ込み、充電完了と言わんばかりに愛車に戻りエンジンを優しく掛けた。

ゆっくりと走り出した方がいいが、また当面の目的地を設定するのを忘れた僕は、宛もなく上信越道を流す事になってしまった。

すぐ先の軽井沢で降りても別に構わなかった。

ただ一人きりの軽井沢は淋しく、そして切ないのはわかってる。

一瞬の速答で出口をパスし、10本近く連なったトンネルへと入って行く。

お腹が空いたな

ふと思った。

そう思うと、お腹の中に潜んでいた虫が一斉に大きな鳴き声を出し始めた。

長野と言って連想するモノ。

安直かつ単純明快な僕は蕎麦が思い浮かぶ。

お気に入り蕎麦。

そうだ、彼処があったか

ようやく第2の目的地が見つかった僕は、惰性で緩めつつあったアクセルをもう一度踏み込んだ。

第12話 懐かしい景色（前書き）

ようやく長野に到着した僕。

市街地には目もくれず、目的地をひたすらに目指す。

数年振りに辿り着いたそこには、相変わらず大好きな雰囲気が存在していたのであった。

第12話 懐かしい景色

あれだけ迷っていた目的地が決まったからか軽井沢の出口をパスし、以前なら程遠く感じられた10本近く連なったトンネル群を、僕はさほど苦には思わなかった。

佐久平を過ぎた辺りから先程よりも増して綺麗な青空が眩しく感じ、雲一つ無い事に小さな喜びを覚える。

オーディオからはお気に入りの少しマニアックなZOAが恰好良く、そして心地良いジャズチックな音楽を奏でている。

相変わらずの交通量の少なさが快適さを更に助長させ、いつまでも適度なスピードで愛車を流していたい感覚にさせた。

何事も無く更埴JCTに辿り着き、そこから新潟方面に進み程なくして降りるべき長野の出口に到着した。

躊躇する事なく料金所で通行料金を支払い、そのまま一般道に入る頃には、車内のデジタル時計が8時を示していた。

高速を降りた安堵感か、それとも優越感か、どちらにしろ空腹感を覚える自分。

直ぐ様マクドナルドの看板が目に入り、朝マックでも口にしようかと頭をよぎる。

長野まで来て、普段日常でも食せるモノは如何なものかと思い、かなり空腹ではあったが呆気なく素通りした。

まだ我慢出来るしね

そう自分に言い聞かせ、長野市街地を適度なスピードで進んで行

く。

何度か通った事のある、あまり得意ではない七曲を何とかクリアし、新緑に囲まれた数年振りの道へとようやく出る事が出来た。

昔、夏に訪れた時には避暑地という事もあり、ある程度の交通量があつた記憶がある。

だが今は閑散期、朝早いという事も手伝ってかすれ違う車さえいない。

少しだけ不安が込み上げてきたのだが、さほど気にする事なく車を走らせて行く。

七曲を越えて3、40分くらいか、やっと待望の戸隠に入る事が出来た。

澄みきった空気。

懐かしい景色。

この雰囲気が好きで、君と幾度となく訪れた事を走馬灯の様に思い出す。

懐かしさと嬉しさと、そんな色々な感情が複雑に押し寄せ、一刻も早く愛車を降り、そしてゆっくりと噛み締めながら歩きたいと思う僕。

そんな衝動を押さえつつ僕は戸隠神社の駐車場に到着し、車を止める事にした。

凜とした空気。

樹齢数百年はあろう堂々たる大木の数々。

そして何とも表現し難い程の神々しい神社。

心底癒され、そして未知なる力を与えてくれるこの場所。

僕は一步一步噛み締める様に歩み寄り、君の新たなる旅立ち、そして自分自身の事を深々と手を合わせたのだった。

参拝を済ませた僕は食い気を思い出す。

空腹で踏み外さない様、神社のかなり高く段数のある石段をゆっくり慎重に降りて行く。

長い石段を降りきったすぐ左手に風格のある建物、そう、目的地であつたうずら家である。

繁忙期であれば長蛇の列は避けられないお店なのだが、幸い閑散期プラス午前中だったお陰で、今までの数回の来店時が嘘の様にすんなりと入店する事が出来た。

何一つ迷う事なく、盛り蕎麦を注文する僕であつた。

第13話 君との足跡（前書き）

戸隠を十分満喫した僕。

でも何だか物足りなさを感じ、別の君との思い出の地を目指して車を走らせて行く。

第13話 君との足跡

趣がありかつ歴史を感じさせる店内は、数年前と何ら変わる事はなかった。

全部で5人程の先客がいたが、以前訪れた時に比べれば目に余る空席。

やはり閑散期だからか、と自分なりに解釈しつつ待つこと数分、幾度となく食した事のある、美しく水々しい蕎麦が運ばれてきた。

空腹に耐えきれぬ僕は、何の躊躇いもなく運ばれてきたその蕎麦を手繰り始める。

相変わらず美味い

勿論空腹が最大の調味料になっている事も否定出来ない。

だが、コシがありかつ鼻に抜ける蕎麦の香り。

新蕎麦の時期では決してないが、それでいてもこの風味。

辛味大根のツンと鼻にくる辛さもまたいい。

僕はあつと言う間に一人前をたிரげた。

愛想のいい店主に会計を済ませ、軽く会釈をし店の外へ出る。

やはりここに来て良かった

そう思った。

出来る事ならやっぱり君と来たかったと無理難題な事を僕は思った。

さっき降りてきた石段を今度は登り境内を眺めつつ車に戻ってきて、車のエンジンを掛け、煙草に火を付けながら考える。

次は何処に行こうか？

折角長野まで来たのに、蜻蛉帰りは勿体無い。

そう思った僕は、以前君と一緒に行った場所を思い出そうとしてみた。

しばらく考えた後、ふと2人でよく行った温泉の存在が頭の中をよぎる。左腕にしてあるオメガを確認してみるとまだ12時にもなっていない事に気付く。

ここ、戸隠からではかなり距離があるけれど、時間もまだまだ早い。

そう思った僕は戸隠神社、そしてうずら家に別れを告げ、かなり遠い思い出の温泉へと向かう事にした。

新緑のすがすがしい空気がこの上ない程心地良く、車の窓を全開にして走っていた。

目と鼻を突く排気ガスまみれの都内では、決して窓を全開にする事など皆無であるが、ここではそれが当たり前のように出来る。

それがまた尚更気分を心地良くさせ嬉しかった。

苦手な七曲を慎重に下り、ようやく市街地に戻ってくる事が出来た。

別に急ぎの旅ではないから、下道をひたすらに走っても構わなかったが、多少道路が込み合ってきた様に思われ、渋滞が大嫌いな僕は精神安定の為に高速を使う事に決めた。

少し渋滞に巻き込まれながらも、なんとか行きに降りた長野の入口に着き、そこから新潟方面へと進んで行く。

高速は相変わらずの空き具合で、難なく信州中野へと辿り着いた。

ここから思い出の温泉までは山道をかなり登らなければならないのは分かっていた。

君と一緒に来た時は別段苦にも感じなかったけれど、今は僕一人。長い距離を一人で走ってきたせいもあって、僕は信州中野の出口横に車を停車させて、少しでも休憩する事にした。

第14話 思い出の道程（前書き）

少し疲れた僕は高速出口脇で転た寝をした。
目が覚め、多少回復した身体に鞭を打ちつつ、君が好きだった温泉
へと向かうのであった。

第14話 思い出の道程

太陽が昇る大分前から出発し、かつずっと一人切りでの運転だったせいか、いつの間にか車中で転た寝をしていた。

すぐ脇を通過する大型トラックの騒音と振動で目が覚めた僕は、車内のデジタル時計に目を向ける。

どうやら小一時間程夢の中にいたらしい。

最大限に倒していた座席を元の位置に戻したのだが、変な体制のお陰で身体中に痛みを覚える。

とりあえず車外に出て、手を天高く伸ばしストレッチを試してみた。身体が解凍されていくかの様に隅々まで血液が流れていき、随分と痛みが取れてくる。

たかが小一時間とはいえ、やはり仮眠をしたことが功を奏した様で頭はスッキリと晴々していた。

そして鋭気を養われた僕は、意気揚々と山道を進んで行く事にした。

ガソリンの残量がかなり減っていて、メーターの針が半分を大きく割り込んでいるのに気付く。

走り始めてすぐにガソリンスタンドを見つけ、左のウインカーを出しながら迷う事なく入った。

寂れたスタンドは値段が表示してはなく、僕を少々不安な気持ちにさせたが、その状況に似合わない覇気のある店員だった事もあった。か少しだけホッとさせてくれた。

ハイオクを満タンに入れ、7千円弱の代金を愛想笑いと共に支払う。

店員からお釣りを受け取り、これまた覇気のある誘導にて国道に戻った。

以前君と来た時にはかなりキツイ山道に感じた記憶があったのだが、小一時間程休憩をしたからか、はたまたガソリンをお腹一杯にいれた愛車のお陰か、それ程キツくは感じられなかった。

すれ違う対向車は皆無で、走り易い事この上無い。

何の問題も無く、そして何の障害も無くガソリンスタンドから30分強で目的地であった温泉、夜間瀬に到着する事が出来た。

人里離れた山奥にある秘境とも言えるこの夜間瀬温泉。

ひよんな事から昔君との旅行中に見付けて気に入ったのだが、その佇まいも以前と何ら変わらずひっそりと存在していた。

何か理由がある訳じゃない

ただ、何となく落ち着く

あの時と同じ感覚。

決して綺麗という訳じゃなくて、何の派手さも見当たらない。

だけれども何故だか心地良くて安らぎがある好きな場所。

そして君が好きだった場所。

車を1台も止まっていらない少しだけ寂しい駐車場の端に止めた僕は、助手席に無造作に置いていた黒いポーターのバックからバスタオルと下着を引っ張り出し、財布の中にある小銭をボトムスの左ポケットにねじこんだ。

車にロックを掛け、ゆっくりとした足取りで入口へと向かう僕であつた。

第15話 貸切りの空間（前書き）

数年振りに訪れたこの温泉。

貸切り状態に戸惑いもあり嬉しさもありでゆっくりと浸かろうとするが、相変わらずの高温に怯む僕だった。

第15話 貸切りの空間

以前訪れた時と変わらぬ佇まいで、入口も何ら変わっていないなかった。

まだ真新しいお気に入りのお黒いエンジニアブーツを入れて左手にある古ぼけた下駄箱の一番上に置いた。

受付にいた愛想のいい初老の男性に入浴料金500円を支払い、軽く会釈をして緩やかな階段を降りて行く。

男性と書かれた青い暖簾をくぐり、脱衣所へと入って行った。

秘境に近くかつ無名な事もあり、そして入浴とはまるでかけ離れた時間だったせいか脱衣所に置かれている荷物や洋服は皆無だった。多少迷いつつ有り余るプラスチック製の籠から一番奥で一番上のそれを選ぶ。

持参したバスタオルと下着を無造作に投げ込み、誰一人いない事も手伝って何の恥じらいも無く着衣を脱ぎ捨て、同じ様に白い籠に投げ入れた。

当然ながら先客は猫一匹すらいなく、まるで貸切りの様な錯覚に陥る。

昔、君と訪れた時は地元と思われる初老の男性が数人いた事を思い出したが、今は自分ただ一人。

とりあえず真ん中の鏡の前に腰を下ろし、先程かいた寝汗を洗い流す事にした。

備え付けの固形石鹸とシャンプーを使って少し乱暴目に身体を洗い、これまた古びたシャワーで一気に洗い流す。

さっぱりとしたところでいざ湯船に浸かろうとした時、ふと君の形見であるリングを気にかけた。

あれ以来、肌身離さず首から下げている形見のリングだが、硫黄泉であるこの温泉にそのまま入ってしまったては変色してしまう事を思い出したのだ。

当時身に付けていたアクセサリが真っ黒になって、君と大笑いした記憶がある。

僕は未だ誰一人としていない脱衣所に戻り、古びた籠の奥底にそっと形見のリングをしまい、それからもう一度浴場に戻った。

恐る恐る右足を湯船に入れてみようとするが、端から見ればおかしな光景なのだが、なかなか勇気が湧かない。

そう、相も変わらずかなり熱いのだ。

猫舌ならぬ猫肌である僕にとっては少々キツイ温度で、室内に設置してある温度計は47℃を差していた。

勇気を振り絞り、覚悟を決めて勢いよく湯船に入った。

おそらく10秒くらいか、堪らず湯船から飛び出し大きな深呼吸をする。

本当に相変わらずだな

そんな事を思いながら、まだ少しだけマシな併設された露天風呂へと向かう。

幸運にも露天風呂の温度は僕が入る事が出来るギリギリくらいの温度だった。

御世辞にも広いとは言えないけれど、心地良い春風を受けながらの露天風呂はこの上なく気持ちがいい。

猫肌で、なおかつすぐに逆上してしまう僕であったが、この時ばかりは出来るだけ長く湯船に浸かっていたいと感じていた。

第16話 意外な言葉（前書き）

逆上せた事もあって温泉から上がった。

湯上がりに烏龍茶を飲み煙草を吸いながら黄昏ていた僕に、受付にいた初老の男性が意外な言葉を掛けてきたのだった。

第16話 意外な言葉

東京では桜の花弁もすっかり落ちきってなくなり、大分暖かくなってきたとはいえここは信州。

しかも市街地から離れ北志賀高原にある温泉である。

時間も夕方に差し掛かっている事もあって結構冷え込んできた。

それが逆に露天風呂の高温を少し緩和してくれて、猫肌の僕にとっては好都合であり、心地良さも手伝って普段以上に湯船に浸かっていたのだが、流石に逆上してきた自分に気付く。

いつまでも入っていたいこの不思議かつ心地良い感覚に終止符を自ら打ち、名残惜しいけれど湯船から上がる事にした。

持参したバスタオルを籠から探し出し身体を丁寧拭く。

同様に持参した新しい下着を履き、少し抵抗があったが脱ぎ捨てである今まで着ていた服を着た。

最後に外していた君の形見をしつかりと首から下げる。

昔から銭湯なり温泉なり風呂上がりには瓶の牛乳、もしくはコーヒ―牛乳を仁王立ちで腰に手を当てて飲み干すのが定番である。

普段はしないのだが、たまにはいいかと思いつく横にあったガラス張りの業務用冷蔵庫を目指し緩やかな階段を昇る。

辿り着き視線をその冷蔵庫にやるや否や、生憎その両方とも置いてはいなかった。

その気持ちを察してか、先程も受付にいた愛想の良い初老の男性が、売り切れなんだよ、と申し訳なさそうに言った。

苦笑いをしながら、仕方なく烏龍茶を冷蔵庫から取り出し、代金を払った。

入口でサンダルを拝借し、外にある赤く年季の入ったベンチに腰を降ろして先程買った烏龍茶を一口飲んだ。

煙草を目の前に止めてある愛車に取りに行き、戻ってきてもう一度ベンチに腰を降ろして火を付けた。

高原の木々の間を抜ける風が少し寒く感じ、湯冷めを心配しつつも僕は全く気にする事なく煙草を吸い、そして烏龍茶を飲んでいた。別に湯上がりに休憩したかった訳ではなかった。ただ、君の事が頭をずっとよぎっていたのだ。

君は羨ましいと思っているかな

僕はそんな事を思っていた。

元はと言えば僕よりも君が好きだった場所。

そして、君と一緒に訪れたかった場所。

そんな複雑な気持ちに寒いと感じられる風の中、僕はその場を動けずにいた。

何分くらい経過したのかは分からなかったが受付にいた初老の男性が心配したのか、こちらに向かってくるのが見えた。

そして相変わらず愛想良く話し掛けてきた。

湯冷めして風邪引くよ

その優しく、温かい言葉が普段無感情気味な僕の心に響いた。

ありがとうございます
考え事してて

愛想笑いをしながら答えた。
すると初老の男性がこう言った。

お兄さんは若いから色々あるだろうね
でもね
でも、負けちゃダメだよ

意外だった。

そんな事を言われるとは夢にも思わなかったというのもあるが、
それよりもまるで全てを見透かされている様だった。

思わず込み上げてくるモノを自分自身感じたのだが、必死に堪えて会釈するのが精一杯な僕だった。

第17話 温もり（前書き）

初老の男性の優しさ。

その本当に温かい心に、閉ざしていた僕の心が少しずつ開かれていくのがわかる。

そしてまた意外な事を言われた僕は戸惑いながらも素直に答えていく。

第17話 温もり

君が遠くに旅立って以来、普段無愛想で無感情気味になっていた僕の心に響いた見知らぬ初老の男性の何気ない言葉。

その素朴で温かい言葉に僕は何か救われた様な気がしていた。

君の旅立ちを現実の事としてどこか受け入れられなくて、これは夢だと自分自身に言い聞かせていた。

またいつか、何処かで偶然に出逢えると思っていた。

でもそれは現実逃避で、そして決して叶わぬ事だというのもわかってる。

だからこそ一人になりたくて、自分自身を見つけたくて旅に出た。その初老の男性の一言に僕はほんの少しだけ気持ちが楽になったように思った。

でもそれは現実逃避で、そして決して叶わぬ事だというのもわかってる。

だからこそ一人になりたくて、自分自身を見つけたくて旅に出た。その初老の男性の一言に僕はほんの少しだけ気持ちが楽になったように思った。

拝借していたサンダルを返却して自前のエンジニアブーツに履き替えようとして温泉の入口に戻ると、再びその男性が僕に優しく喋り掛けてきた。

湯冷めしたんじゃない

お代はいらないから、もう一度温まっていきなよ

本当に嬉しかった。

見ず知らずの他人にここまで優しくして貰ったのは初めてかもしれない。

今まで自分勝手に生きてきた僕。

そして君が遠くに旅立って以来、心を完全に閉ざしていた僕。

それ全てが一気に解凍されていく感覚。

何の躊躇いも無く、僕はただその本当に優しく、温かい言葉に甘える事にした。

相変わらず僕以外の客は見当たらない。

気温が大分下がってきたせいか先程よりも露天風呂は適度な温度になっていて、それが心地良く、僕は肩まで浸かり手足をおもいきり広げた。

そして日が傾きつつある夕空を仰ぎながらただ黄昏ていた。

一度使ったバスタオルは湿り気を帯びていて少し不快感を覚えたが、仕方ないと自分に言い聞かせ濡れた身体を拭く。

拭き終わり、また服を着て最後に忘れずに形見を首に下げながら2往復目の階段を昇った。

カウンターの前まで行き、本当に御世話になった初老の男性に深々と頭を下げ、お礼を言った。

すると男性がまた予想だになかった事を言い始める。

これから何か予定あるかい？

一瞬何て言えば良いのかわからなかったが、何故だかこの人の前では嘘を言っただけいけない気がした。

いえ、ないです

男性は続けて言った。

お腹空いてないかい？

良かったらウチでゴハン食べて行きなよ

何故か断るといふ選択肢が僕の中には存在していなかった。

第18話 言われるがままに（前書き）

男性を待つこと小一時間。

軽自動車に付いていき、その男性の家に着する。

するとそこは想像していたモノとはかけ離れた古びた家だった。

第18話 言われるがままに

普段なら見知らぬ人からの優しさには有無を言わず疑ってかかる節がある僕。

ただ、この時の僕は何かが違っていたのかもしれない。

自分自身を見詰め直すという名目の小旅行がそうさせたのかもしれないかった。

あと1時間で終わるからさ

ちよつと待って貰えるかな

僕は男性の優しくそして温かみのある言葉に黙って頷いた。

暇を持て余していたが、周辺には時間潰しをする様な場所など皆無で、別に何かをしたかった訳でもない僕は先程の古びたベンチに再び座る事にした。

まだ半分近く残っている烏龍茶を一口飲み、再び煙草に火を付ける。

くわえ煙草で目の前に止まっている愛車に行き、助手席に無造作に転がっていた携帯電話を取ってベンチに戻った。

相変わらず着信もメールも入っていないくて少し寂しい気もしたが、いつも通りな事もあって別段気にする事もなかった。

手持ち無沙汰に彼はいいじってほみたのだが正直面白くない。

すぐにいじるのを止めて座っているベンチの横にそっと置いた。

気が付くと既に3本目の煙草に火を付けている事に気付く。

小腹が空いていたからか、立て続けに吸った煙草のせいで少しだ

け気持ちが悪くなっていた。

それを誤魔化す為に残りの烏龍茶を一気に口の中に流し込む。
それでも直らず、入口の中にある冷蔵庫にもう一本何かを買いに行こうとした時、男性が微笑みながら入口から出てきた。

待たせたね

遅番の人間と引き継ぎが終わったから、さあウチに行こうか

僕は微笑み返して、はい、とだけ言った。

男性は建物の裏側に止めてあった白い軽自動車に乗り、駐車場の一番端にある僕の愛車の前まできた。

後ろ付いてきなよ

駐車場の一番端に止めた愛車のエンジンを掛け、普段なら必ずする暖気もせずにその軽自動車に付いて行く事にした。

時間にして5分くらいか、少しだけ山道を登って男性の家に着いた。

御世話にも新しいとか広いとかは言えない家で、古く、築50年近くは経っていると思える。

家の前にある庭とも何とも言えない砂利の敷地に男性は車を止めた。

その横に有り余る程のスペースがあり、僕はそこに車を止めた。

狭くて汚いところだけど、さあ、上がってよ

車にロックを掛け、言われるがままに僕は男性に付いて行っただ。

第19話 居心地の良い家（前書き）

男性の家に上がった僕。

互いに自己紹介的な事を済ませ、不思議かつ居心地の良い時間に吸い込まれていく。

第19話 居心地の良い家

外見とは裏腹に玄関の扉は雪国特有の二枚になっていて、ここが冬は雪深い土地柄という事が容易に想像出来る。

ここは信州で、なおかつ大分山道を上がって来たのだから当然と言えばそうなのだが、コンクリートジャングルが生活拠点である僕にとっては真新しく映り、少しの違和感を覚えた。

男性に促され、狭い事は狭いが意外に片付いている玄関でエンジンアブーツを脱ぐ。

お邪魔します、を大きな声で言い、一礼と共に男性の家の中へ上がった。

玄関同様、意外にも家の中は広く整理整頓されていて、男性が几帳面である事が想像出来た。

借りてきた猫の様に落ち着かない様子を見抜いたのか、男性は手招きをしながら、ここに座りなよ、と言ってくれた。

手招きしてくれた部屋は居間というかりビングというかどちらとも言い難い部屋ではあったが、ほのかに井草の香りがする空間で居心地が良く感じられる。

とりあえず中央にあるテーブルに合わせ、窓際に背を向けて座る事にした。

片付いている部屋の中をただ何となく眺めていると、多少煤けた仏壇と共に綺麗な女性の遺影が目に入った。

話の口火に問い掛けてみようかと考えたが、それが良いのか悪いのかかわからず、とりあえず黙っている事にした。

程なくして男性が台所からグラスに入った見るからに冷えていそ

うな麦茶を持ってくる。

テーブルを挟んで対面に座り、持ってきた麦茶を差し出してくれた。

奥さんですか？

黙っているつもりだったのに、つい言ってしまった。

そうだよ

10年前に亡くなったけどね

少しだけ寂しそうな表情を見せた男性に申し訳ないとばかりに小声で、すみません、とだけ言った。

男性はすぐに笑顔を見せて、気にしないでいいよと言う。そして続けて言った。

もう10年になるからね

寂しいのも慣れたよ

そうだ、話しは変わるけど名前聞いてなかったね

私は佐伯って言うんだ

僕は自分の名前や住んでいるところをまるで自己紹介の様に話した。

不思議な感覚だった。

見ず知らずの家に上がり、見ず知らずの人と話す。

僕の性格や生活パターンからいつて絶対に有り得ない事で、自分でも信じられない事だ。

ただ、何故だか不快感は1ミリも感じなかった。

お腹空いたかい？

適当に作るけどいいかな

なにせ独り暮らしだからさ

何でも大丈夫ですよ

佐伯さんにお任せしますよ

何でも手伝いますから

何もしなくていいよ、とニコッとだけ笑い、佐伯さんは狭い小綺麗な台所に向かった。

第20話 乾杯（前書き）

手慣れた手付きで料理をする姿を眺める僕。

不思議だなと思いつつ、居心地の良さにただ身を任せていた。
料理が出来上がり、乾杯して苦手なお酒を飲むのであった。

第20話 乾杯

初めて訪れた家で初対面の人が料理をしているのを黙って見ている、そんな不思議な出来事が現実にも目の前で起きているのが何とも奇妙で、また可笑しくもあった。

普段生活しているコンクリートジャングルでは、見知らぬ人の親切には裏があると思うのが常であり、疑う事が自己防衛の術である。だが今日の前で起こっている出来事は何かが違う、本物の優しさを感じられるのだ。

その証拠にこの心地良さ、そして安心感。

僕はこの佐伯さんという初対面の男性をすっかり信用していた。

少し離れた場所から見ても佐伯さんの手際の良さが分かる。

何かを炒める音と、空腹には少々堪えるいい香り。

どんなモノが出来上がるのだろうかという好奇心が僕の心を楽しませていた。

出来たよ

運ぶの手伝ってくれるかな

作り始めてから一時間強くらいか、台所からこっちを振り向いて佐伯さんは言った。

言われた通り料理が盛られた大皿小皿、そして取り皿や箸をさっきまで僕がいた部屋のテーブルに持っていく。

煮物、炒め物、刺身とあまりの豪華な料理で、2人では間違いなく食べきれない量だと容易に想像出来た。

一通り運び終わった時には、結構広く感じたテーブルが手の置場

もない程に鮎詰め状態になっていた。

待たせたね

じゃあ食べようよ

僕は両手を合わせつつ大きな声で、いただきます、と言った。

全てにおいて少々濃い味付けに感じたが、それを差し引いても有り余るくらい美味しい。

空腹も手伝ってか次々に口へと運んでいく僕。

その姿を見て、笑いながら佐伯さんは言った。

口に合って良かったよ

あ、お酒は飲めるかい？

弱いですけど、少しなら付き合いますよ

そう言うとき笑顔のまま、冷蔵庫から見るからに冷えていそうな瓶ビールを2本持ってきた。

勢いよく詮を抜き僕の方にその瓶ビールを差し出して来る。

僕は両手でグラスを持ちゆっくりと注いで貰い、今度は御返しと言わんばかりにその瓶ビールを渡して貰って佐伯さんにゆっくりと御酌した。

じゃあ乾杯

正直言って僕はお酒は弱いしあまり好きではないのだが、この時ばかりはそんな事お構い無しで一気に飲み干した。

第21話 肩の荷が下りた瞬間（前書き）

苦手なお酒を飲みながら、自分の思いを佐伯さんにぶつける。
黙って聞いてくれていた彼が発した何気ない言葉。
その言葉に涙を堪える事が出来なくなっていた。

第21話 肩の荷が下りた瞬間

久方ぶりのビールはほろ苦くそれ程美味しいとは感じなかったが、よく冷えていた事もあり口当たり良く飲む事が出来た。

もう1杯と言わんばかりに差し出してきた瓶ビールを微笑みながら奪い、佐伯さんの空になったグラスに注ぐ。

それでも注ぎたそうな佐伯さんの表情を察し仕方なく自分のグラスに注いで貰う。

それを一口だけ飲み、酔いが回らぬ様にとテーブルの上に並んでいる煮物やら炒め物などを一気に口の中に押し込んだ。

しばらくの間ビールを飲み、料理を食べ、そして他愛のない話をしていた矢先、不意に佐伯さんは優しく問い掛けてきた。

温泉から上がって涼んでいた時は随分と難しい顔をしていたね

こんな山奥に一人で来るなんて何か訳でもあったのかい？

良かったら幾らでも聞くよ

涙こそ流れ落ちなかったが、複雑な気持ちの中に嬉しさやら何やらが入り混じって込み上げてくるものがあった。

やはりこの佐伯という男性には嘘や見栄は通用しなく、そして自分が不思議と正直になれる。

大きく深呼吸を一度して、僕は話し始めた。

人付き合いが不得意な事。
人を信じる事が苦手な事。

偶然君と出会った事。

君と恋に落ちた事。

僕のワガママで君との恋が終わった事。

そして

そして君が亡くなった事。

1時間か、それとも2時間か。

僕の頭や心にあるその全てを言葉として表現出来るだけ、僕は佐伯さんに話した。

その間反論も批判も、そして何の叱咤もなく佐伯さんはただ聞いてくれていた。

僕は、僕は本当に嬉しかった。

すがすがしい程に肩の力が抜け、胸につかえていた何かが取れた気がした。

今まで全てを抱え込んでいた僕にとって、本当に身体が軽くなった様な感覚。

僕のその肩の荷が下りた事による安堵の表情を見て、佐伯さんは今まで真一文字に閉じていた口を開いた。

少しは楽になったかい？

大きく、そして嘸み締める様に頷く僕。

それを確認した佐伯さんは、続けて語り出した。

生きていれば辛い事ばかりさ

でもね

それを乗り切るのが男だよ

苦しんで泣いて

のたうち回って

それでも前を向く

いつか光が差し込んだ時に

胸を張って歩ける様にね

止める事の出来ない大粒の涙をボロボロと流し、骨身に染みるその優しく、そして大きな言葉をただただ素直に聞いている自分がいるのであった。

第22話 二日酔いの朝（前書き）

久し振りに晴々とした気持ちになれた僕は、許容量を超えたお酒を飲む。

記憶を失い、朝起きると二日酔いに見舞われていた。

第22話 二日酔いの朝

雨が頻り降った後、汚れていた大気が綺麗に流され晴々とした景色になるのと同じ様に、大粒の涙をボロボロと流した後の僕の心はスッキリとしていた。

心だけでなく、背負い続けていた肩の荷も全て無くなったのかもしれない。

馬鹿みたいに何でもかんでも全て一人で背負い込んで、それでいて勝手にパンク寸前になっていた僕。
本当に救われた自分がそこに居た。

ようやく笑顔になれたね

少しは晴れたかな？

そうそう

笑っていなきゃ駄目だよ

佐伯さんはそう言うと、今まで以上の優しい笑顔を見せてくれた。そしてその笑顔を共にもっと飲もうと言わんばかりにビールを差し出してくる。

僕は、僕はこの時ばかりはお酒が弱いとかそんな事を気にせず飲もうと思った。

カーテンの隙間から差し込んでくるすがすがしい光と、少しうるさく感じられる小鳥のさえずりと、そして少しばかりの頭痛とで僕は目が覚めた。

左手に付けっぱなしのオメガに目をやると針は8時丁度を表示し

ている。

飲めないお酒を無理矢理に飲んだせいか、昨晚の記憶が途切れ途切れになっていて、どうやって寝たのかわからない。

記憶を辿ろうとして色々思い出してみようとしていると、味噌汁のいい香りと共に台所から佐伯さんの声がする。

おはよう

よく眠れたかい？

僕はい、とだけ答えた。

真新しい客用と思われる布団を部屋の片隅にたたんで昨日と同じ位置にテーブルをセットした。

すると既に出来上がっていた朝食を次々に運んでくる佐伯さんに僕は問い掛けてみた。

すみません

調子に乗って飲んだみたいで途中からあんまり記憶無くてご迷惑かけてすみません

大丈夫だよ

迷惑なんてかかってないよ
自分から布団に入ってたしね

笑いながらそう言ってくれた事に少しばかりの安心感を覚え、と同時に大きく深呼吸をした。

昨日の晩ゴハン同様、朝食も二人では食べ尽くせない程の量がテーブルに並ぶ。

二日酔いなせいもあって、少しだけ苦笑いをしながら両手を合わせ大きな、いただきます、の声と共に食べ始めた。

二日酔いであまり食が進まない気がしていたのだが、思いの外食べれる自分がいた。

佐伯さんに勧められたおかわりこそ断ったが、それでも十二分に食べた気がする。

対抗する気など毛頭ないだろうが意外にも佐伯さんも食べていて、あれほどあった量が殆ど消えて無くなっていた。

僕は心から感謝の意を込めて深々と頭を下げ、ご馳走様と言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2365c/>

last letter

2010年10月19日02時20分発行